あさ 2

2019

うららかや塀にぬうっと佛の面

行乞に目覚めし窓の梅の花

春障子に写りし栗鼠の交尾かな

絵と俳句・関合正昭

あと

二月

須賀忠男

枯柏

東京　佐藤　喜孝

かざしたる憲法九条冬将軍

ハンカチもティッシュもないの枯柏

都鳥水布浪布雪の布

ハワイまたすこし近寄る春のなゐ

晩年は春の謂なり風呂の柚子

躬の内のどこか光った雪の朝

コンビニで切手を舐めて二日かな

三日はやタヲルのほつれのごときかな

東京　赤座　典子

冬欅

藤棚や枝葉のシデの翻る
墓地にある皇帝ダリア頷けり
他愛なき喜劇なりしとおでん鍋
一人居や句のきっかけと星冴ゆる
冬欅落暉を徐々に吸込めり

埼玉　秋川　泉

暮の街

降りしきる木の葉に猫の顔をあげ
ツーリングはげしく木の葉降る中を
冬日和鳥の巣箱にりすのゐる
聖夜劇天使のつばさ布地絵に
霙降る知る人もなき暮の街

埼玉　大日向幸江

生姜酒

銀の星爪に描くや生姜酒
獣肉をジビエと食べる降誕祭
拾はれてすぐ捨てられる草紅葉
水仙の葉を分け茎を立てにけり
吟行のランチ皆食べカキフライ

東京　七郎衛門吉保

ひととせ

初雪や過ぎしひととせ隠したる
白一色化粧替へして山眠る
冬の陽を返へす熟柿とピラカンサ
福島の再生ドラマ木守柿
原発に分断されり冬木立

義士の日

東京　篠田　純子

義士の日の朝は未だ夜水を飲む
冬日さす内匠頭の血染め石
義士本懐主税は母を思ひしか
義士の日の首洗いの井覗きけり
内匠頭も吉良も名君冬もみぢ

電球

石川　定梶じょう

潮引いて霰の歓喜干潟打つ
裸木のをどり出さうな三日の月
雪を待ち屋根の勾配能登瓦
嬉しくてさびし師走の今頃は
網結けば電気の球の納屋に雪

年送る

東京　須賀　敏子

冬籠捨てられぬ布を柄合せ
祖母の被布宝の様に仕舞けり
冬晴るるビブリオバルトに孫むすめ
短日や鍋一杯の煮豆かな
年送る前髪少し短かめに

イギリス大使館

東京　田中　藤穂

人のみな足早本郷冬ざるる
木瓜の実のころがってゐる門の中
衛兵に百舌鳴くイギリス大使館
水きらら堀端桜もみぢして
古裂を買ひに師走の京四條

三重　長崎　桂子

冬

老夫婦機嫌よき今朝冬うらら
晴続く壁画の如し冬紅葉
冬の月宙鮮やかに清めらる
肩窄む山茶花梅雨や雨着多色
極月や左手使ふ不自由さ

東京　森　なほ子

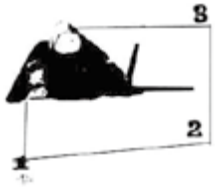
冬青空

落葉掃共に掃かるる蝉の殻
寒林へ礫どこかでこつと音
百合樹は冬青空の中にあり
百合樹の落葉は猫の顔めける
新宿やドコモタワーと裸木と

佐藤　恭子

恋猫

梅が枝や天地遠く又ちかく
恋猫よまだつづくのかながいのだ
門番の足元するり恋の猫
おでんの香雷門の外国人
空家の門みかん重たく下がりをり



前月抄

初しぐれカミオカンデン通り抜け　佐藤喜孝

白々と並ぶ湯呑や秋の暮　森なほ子

着ぶくれて昔々の石の街　赤座典子

渦巻きて深みにをどる紅葉かな　秋川　泉

文化祭動きだしさう馬車に乗る　石森理和

義士の日の空の青さに月白く　大日向幸江

手足欠くポンペイの像天高し　七郎衛門吉保

鴨の陣桜田濠に日比谷濠　篠田純子

小春日や遮断機上がること忘じ　定梶じょう

百年の家百年の木守柿　須賀敏子

冬瓜や緑青色の岩絵具　田中藤穂

秋深し老人会のメロディベル　長崎桂子

石楠花の花の莟に冬の風　早崎泰江

喜孝抄

十二月号作品より

秋川泉・森なほ子・佐藤喜孝

コンビニおにぎり１２３で秋日和　　佐藤　喜孝

句会では誰も１２３の意味がわかりませんでした。後でおにぎりのフイルムをはがす時のあの順番とお聞きし、笑いが起こりました。解ってみればなんとも楽しい句。まるで１２３で秋日和になったようで気持ちが弾んできます。佐藤先生の句は自解をお聞きすればなあんだそういうことかと実に納得できるのに、凡人にはあまりに率直に言われるとかえって目眩ましを食ったように解らないことがあります。（なほ子）

小鳥来る二階手摺の糞掃除　　長崎　桂子

二階のベランダに小鳥が来るのですね。ヒヨドリ、シジュウカラ、ヤマガラ、メジロ。さて、今日はどんな小鳥が飛来しましたか。糞掃除はちょっと大変でもその小鳥たちの愛らしさを日々楽しまれている事でしょう。（泉）

秋の朝気持ちいいねと声過ぐる　　森　なほ子

秋と云う季節は夏の激しさを通り越し空気が澄み渡り透明感がある。その朝に誰もが気持ちの良さを感じている時、その事を言葉にして通り過ぎた人。小学生も中学生も学生も大人もみんなが思っている事を!!、その何気ない一瞬を捕らえたやさしい気持ちになる句。

本当に気持ちいいね!!（泉）

昼月や豆大福に豆透けて　　森　なほ子

句会でこの句を読んだ時、すぐに石田波郷の句を思った。思ったのだが句の完成形を思ひ出せずにゐた。帰宅して繙いた記憶のない波郷全集を手に取った。

晝月や山獨活を掌に匂はしめ　　波　郷

波郷は昼月に繊細なにほひを添へ、なほ子さんは大福の皮に透けて見える豆といふ繊細な視覚で作られた。波郷は格調たかく、なほ子さんは〝豆透けて〟と力を抜けれた所がおもしろい。『俳文学大辞典』から抜き書きを。

取り合せ

二つの題材を効果的に配合し、その相互映発により詩趣を醸成する方法。「青柳の泥にしだるる汐干かな　芭蕉」の類。許六は芭蕉の「発句は畢竟取り合せものと思ひ侍るべし。よくとりはやすを上手といふなり」の言を引き、取り合せを蕉風における句作の要諦とした。近現代俳句にいう「配合」「二物衝撃」も同旨といってよい。（喜孝）

抽籤の梯子車試乗秋の天　　赤座　典子

「秋祭」のタイトルのなかの一句です。祭のイベントの一環でしょうか、消防署の梯子車が出ていて、抽選で試乗させています。見事当選した作者、おっかなびっくり？乗り込んで……この一句を得ました。あの高さまで上がったら、本当に秋の天を実感されたことでしょうね！（なほ子）

朝靄の底よりぬっと火焔茸　　秋川　泉

席題の「茸」でこの句を作られました。私は茸はかなり詳しい方かなと思っていたのですが、このきのこの事は聞いたことがありませんでした。画像には想定外の全身真っ赤な茸の姿が。さらに触れただけでかぶれる猛毒と。その恐ろしい火焔茸が「朝霧の底」に「ぬっと」出ていたら……的確な表現が強いインパクトを与えています。（なほ子）

錆鉄路撓わな柿と枕木と　　石森　理和

山里近くを行くローカル線の線路。錆びているのは廃線になって久しいのでしょうか。線路近くに大きな柿の木がまっかな実を鈴なりにして撓んいます。鉄路だけでなく枕木まで目をむけたので。重厚な油絵のような味わいになりました。食糧難の時代に必要とされて植えられた柿の木。今、飽食の時代となって採る人もなく生り放題落ち放題で、勿体無いことです。錆びた線路と柿の木とが慰めあっているかのよう。（なほ子）

白菊や加賀麩料理に添へてあり　　大日向幸江

金沢に旅をされたのでしょうか。

風情のある門構えと暖簾。ゆっくりと流れる時間。加賀麩会席料理に白菊が添えてあり、思い出深いその味は召し上った作者だけの幸せの味なのですね。（泉）

秋天の上昇気流鳶三羽　　七郎衛門吉保

トビは、タカ科の鳥で、カラスより大きく濃い褐色、長めの角尾。ピーヒョロロと鳴く。この鳥が上昇気流に乗って澄んだ秋の空高く、三羽ゆっくり飛んでいる図は、何とも気持ちの良い晴れやかな句と思いました。（泉）

塩害のポプラ並木の枯れ速し　　篠田　純子

二〇一八年九月三十日深夜から十月一日未明にかけて、日本列島に大きな被害をもたらした台風二十四号。巻き上げられた海水が、暴風による雨水と共に降り注ぐことで発生した「塩害被害」。作者がご覧になったポプラ並木も塩分が付いてしまい急に枯れてしまったのですね。どの植物にも辛い台風でした。（泉）

燈を消せば長大息す笊の檸檬　　定梶じょう

不思議な句です。作者はレモンの気持ちがわかるようです、こうこうと明るい灯に照らされて緊張していたレモンが灯を消した瞬間、暗闇で「ふう」とおおきなため息をついたという。レモンにはやはり太陽の光と夜の闇が似合うということ？断定がさすがですね。（なほ子）

エプロンを作る一日小鳥来る　　須賀　敏子

手芸がお得意の作者。今日もミシンに向かって一日すごしました。作っているのはエプロン、軽いミシンの音や鼻歌まで聞こえてきそう。季語もエプロンも動かない完ぺきな一句だと思います。句会でも最高点でした。（なほ子）

あかあかと二間を灯し秋彼岸　　田中　藤穂

広やかな日本間。秋の夕暮れ時でしょうか。彼岸のご供養に、仏壇に灯された蝋燭の揺らぎが、静かな祈りと共に心にしみる句と感じ入りました。（泉）

あをキーワード俳句辞典（はこーはこ）

箱

銛先の息つめてゐる箱眼鏡　定梶じょう
宿題の箱庭いっかう捗らぬ　定梶じょう
蝶の箱かさなり置けり唸り出す　佐藤　喜孝
箱入りのオオムラサキ群れ深大寺　斉藤　祐子
楪や母の針箱ボタン付け　石森　理和
初買の卵二箱紅淡く　佐藤　恭子
春陰の下駄箱に下駄ひとつあり　佐藤　喜孝
母の字の我が名の茶箱更衣　篠田　純子
箱庭の橋をわたりぬ手をつなぎ　佐藤　喜孝
茶を注文箱の隅なり柚羊葵　黒澤　佳子
釘箱の中の折り尺昭和の日　中川句寿夫
釘箱の中も探して梅雨に入る　中川句寿夫
一帖の箱庭の景草紅葉　長崎　桂子
植物園「何卒」と花梨大箱に　田中　藤穂
一箱を一気に拡ぐ蜜柑かな　石森　理和
大箱の燐寸買ひたり茶が咲いて　中川句寿夫
絵の具箱ひっくり返したごと躑躅　七郎衛門吉保
フィヨルドの箱庭にあり旅の船　七郎衛門吉保
小六月四角い家から箱が出る　佐藤　喜孝
風花の舞ふ駅にある投書箱　秋川　泉

函

青葉木菟函館山の夜明け前　江倉　京子
投函の迷ひ吹つきる息白し　早崎　泰江
投函後独語して去る夜学生　定梶じょう
牛乳の空函かわく梅雨晴間　竹内　弘子
梅雨の月青きポストに投函す　篠田　純子
函館は坂多き街東風吹けり　早崎　泰江
角一つ曲り投函冬の月　鈴木多枝子
金星を仰ぎつ賀状投函す　早崎　泰江
くちなしの実を描き添へて投函す　石森　理和
初めての青函トンネル暮れの冬　赤座　典子
坂多き函館元町雪明り　赤座　典子
函館朝市呼声高し雪解道　赤座　典子
吹雪止み函館山に長居せり　赤座　典子
寒燈や賽銭函をのみ照らし　定梶じょう
カステラの木函のしめり彼岸過　竹内　弘子
函船か曳くタグボート梅雨ぐもり　定梶じょう

パゴダ

走り雨パゴタのどこも物売るひと　佐藤　恭子
一塔づつ千のパゴダの夏日受く　佐藤　喜孝
パゴダに棲む蛙や蜘蛛に佛たち　佐藤　喜孝
暮の春パゴタにささる明けの星　佐藤　恭子
パゴタめく国会議事堂春夕焼　篠田　純子

運ぶ

たましひを運ぶ母国の秋騒がし　堀内　一郎

はしかて集

佐藤喜孝

須賀　敏子

平成のボロ市食のみ豊かなり
赤きもの求めし冬のトマトかな
小晦日カルロス・ゴーンビルの黙

一句目。「食のみ豊か」といふ。衣食住の衣と住とが豊かでないといふ事ではなさそうだ。ことわざに「衣食足りて礼節を知る」とある。衣食足りても礼節が足りぬと作者は嘆かれてゐるのだらうか。

二句目。冬の寒さに立ち向かふ作者流の対処法。今の世、冬にトマトは季節はづれ云々といふのも無駄な抵抗。

三句目。時事俳句。作者の立ち位置がわかりづらかった。

森　なほ子

能吏めく自画像冬のムンク展
冬青空「叫び」静かに時超ゆる
晩年の絵の明るくて冬夕焼

一句目。今年の一月二十日まで東京都美術館にてムンク展が催されてゐた。ムンクの生涯を調べて行かれたのだらう。波乱に富んだ人生からは思ひもかけぬ実直な自画像に驚かれたのかも知れない。下五の「展」は詩語になりづらい。例へば「能吏めくムンク自画像枯木立」。

二句目。「叫び」を「静かに」と捉へ「時空を超ゆる」と捉えたメッセージは強い。ムンクの内面に近づかうとする意欲が見える。

三句目。晩年の絵を「明るくて」と詠みムンクによりそひ安堵した作者がゐる。絵画展をテーマに採りあげるのは至難のこと。よく纏められた。

田中　藤穂

十代にこころもどりて賀状書く
蹲踞に知らない小鳥クリスマス
煤逃げの弟子また一人父の部屋

一句目。十代の頃おつき会ひをしてゐた人への賀状。したためてゐる内に思ひは十代に戻ってゐる。長く続いてゐるおつき会ひ。大切な思ひ出で一杯なことであらう。

二句目。蹲踞に見かけない小鳥がきてゐる。小鳥が水をのみにくるだけでも日常の句読点として楽しいもの。北国から渡ってきたのか、見かけない小鳥がきてゐる。少しでも長く居てと息を潜めて見つめる。小鳥にはクリスマスと関係はないが、作者にはクリスマスと重なりこころ浮きたつ。

三句目。人間関係が分かりづらい句。おもしろさうな話が聞けさうな句であるが複雑な人間関係のようだ。左記の句前号正誤。

綿虫や花魁塚は昼下がり

赤座　典子

実南天駅まで二度の立話
風邪ひかぬやうと行交うアーケード
辛うじて平成であり冬紅葉

一句目。生活道路では、男のわたしでさへときをり立話をする。ましてや主婦ともなれば……。「二度」に凡庸な内容に弾みを与へて俳味が生まれた。

二句目。インフルエンザはワクチンを打っても安心できないらしい。アーケードといふ閉鎖？されたやうな道をマスクをして行かれたのであらう。インフルエンザに罹らぬ注意は自分のためではあるが家族のためでもある。

三句目。「辛うじて」に「平成」が生きもののやうである。「あを」会員の大半は昭和と平成の最期を見届けることになった。今回は天皇はお元気なので改号も待たれる。願ふことはいつも同じ、平和な時代になって欲しい。

大日向幸江

東北線鉄の匂に咳込みぬ
年の市人混み離れヒヨコ売り
初詣遅き夜明けを待ち出るや

一句目。「東北線」は東北本線の略。東北本線は東京から盛岡までの二百キロほどのＪＲ鉄道である。東北本線を全線利用とすると何回も乗り継ぎ大層な時間がかかる。鈍行で行くことは叶はぬか、贅沢なことになった。この線を作者はよく利用されるのだらう。「咳」は冬の季語だが、この句の「咳き込む」は風邪などの体調不良から出る咳き込むではない。鉄道の匂を鉄の匂と断じその匂に咳き込んだといふ繊細な句である。「鉄道が鉄の匂」は当然のことだが、「東北線は鉄の匂」で鉄の匂が生きてきた。

二句目。　こういう所に行ったことがないが、年の市は新年を迎へるためにさまざまなものが売られてゐるらしい。雑踏の中目的の物を探して市の外れまで来た作者。そこには新年の準備に必要とは思へぬヒヨコが売られてゐた。「人混み離れ」としっかり詠まれてゐる。

三句目。「遅き夜明け」は出かけやうと逸る作者が思ふことである。マイカーなら好きな時間に出かけられるが始発電車やバスを利用するとなると元気な作者は逸ってしまふ。さういへばわたしはまだ神仏にお参りしてゐないことに気がついた。お参りをしたら清々しい気になるやうな気がしてきた。

七郎衛門吉保

亥の截絵賀状つくりの昨夜かな
百人の顔思ひ出し賀状書く
本年も「変わりなし」一行の賀状

一句目。その年の干支の動物を截絵にして賀状を作るのが作者年末のルーティン。終らせるために昨夜は遅くまで励まれた様子。

二句目。宛名を書く時に顔と共にその人のことを浮かべながら、一枚一枚丁寧に宛名を書かれてゐる姿が目に浮かぶ。

三句目。句だけでは差し出す賀状か、受け取られた賀状か分かり

にくいが、ＦＡＸ発信が十二月二十九日十六時とあるのでお出しになる截絵賀状に添へた一行。この一行でいただいた人も安んずることである。

秋川　泉

自転車で風切ってゆくおかめ市
橋ふたつ渡りし先やおかめ市
熊手市終り人影ちりぢりに

一句目。二句目。酉の市は酉の市詣・とりのまち・お酉様・一の酉・二の酉・三の酉・熊手市・熊手・おかめ市・頭の芋・三島酉の市と歳時記にある。頭の芋は『新日本大歳時記』（講談社）に「とうのいも」と。『図説大歳時記』（角川）には「かしらのいも」と振り仮名がしてある。元は一八五一年発行の『誹諧歳時記栞草』（岩波）には「酉の市　酉の日伊豆国賀茂郡三島の駅にあり」と簡略である。それにしても頭の芋とはなにかと調べてみた。鷲神社のホームページに

「酉の市」のお祭りの時、大きな芋が売られています。この芋は八頭といい、古来より頭の芋（とうのいも）とも呼ばれ、人の頭に立つように出世できるといわれ、さらに一つの芋からたくさんの芽が出ることから「子宝に恵まれる」という縁起物です」と。すっきりした。一句目二句目は数ある中の「おかめ市」を使った。迷はれたことであらう。「酉の市」ではこの句のやうな情緒が薄れる。地元のお酉さまに自転車で風を切り、橋を渡ってゆくのは「おかめ市」がふさはしい。

三句目。初めがあれば終りもある。酉の市の後のさびしさに目を止めて詠まれた。

長崎　桂子

庭師二人帰り釣瓶落しかな
帰り花気力欲しいと思ひけり
小春日や精一杯に家事こなす
紅葉の塩害痛みや労しい

二句目。家に職人が入ると疲れるもの。釣瓶落としの日に静かな時が戻ってきた。「かな」が効いた一句。

二句目。帰り花を見て自らを鼓舞してゐる。帰り花には意外な力があると知った。

三句目。わたしはすぐに明日にせうとズボラを決めこむ。火事は句切れがない。小春日和に精一杯体を動かし充実した一日であった。

四句目。先月「効用の塩害痛みや労しい」と誤入力しそのまま鑑賞してしまった。であらためて。「労しい」に作者の心持ちがあらはれてゐる。辞書には「労しい→気の毒で同情しないではいられない。不憫である」と。見る者も残念に思ふが紅葉の木になり、思ひを馳せるのは作者らしい。

篠田　純子

枇杷の花枝のたわたわ風やさし

火球今刹那に尽きぬポインセチア

喫茶さぼうる北風(きた)に晒して赤電話

一句目。わが家の南と北にあるそれぞれの公園に枇杷の木がある。どちらも大木。常緑樹なので枝の様子も見られない。「枝にたわたわ」だと違和感なく読めるのだが……

二句目。火球は流星より明るいものださうだ。さぞ驚かれたことと思ふ。「今刹那」と重複気味の表現に動揺があらはれてゐる。ポインセチアが残念。

三句目。属目吟。「さぼうる」といふ皮肉な店名がユカイ。

定梶じょう

バスを待つために白息もて並ぶ

暖房がつよすぎないか火葬場

凡庸や冬至この日も句を案じ

一句目。屈折した表現である。「バスを待つ白息」といふ核に、「ために」「もて」と言葉を足す。都会のバスは一時間に何本も走ってゐる。行く先を確かめて乗らないと思はぬ所に連れて行かたことがある。バスを使はなくとも他の交通機関も可能。しかし地方ではさ

うはいかぬ。そこでマイカーが活躍することになる。マイカーを使はぬ人はバスに頼ることになる。外の世界に繋がる大切なラインである。で、「ために」「もて」が作者には必要なのである。

二句目。どきっとした。火葬場で故人にならうとしてゐる人を思ふ句でない。火葬場の暖房が強すぎるといふ。どきっとしないわけがない。故人を偲んだ句ではないと書き出したが、痛切に人の死を残念に思ってゐる。「ないか」と誰に向かって語りかけてゐるのだらう。

三句目。冬至といふ区切りの日にも昨日と同じく句を案じてゐる。「凡庸」とはおもはぬが、自らを振り返るとやはり凡庸かも知れない。

「し」　定梶じょう

たびたび素材を頂いて井上石動さんにはお礼申しあげなければならないのですが、先年末のお手紙に次のような句を紹介して下さいました。

十二月二三日『朝日俳壇』。

稲畑汀子さん選

〈年ごとに風邪の治りの悪かりし〉同じく

〈十二月来てしまひしといふ思ひ〉。

長谷川櫂さん選

〈モネに似し池いっぱいの枯蓮〉。

高山れおなさん選

〈木枯に吹き寄せられし立ち飲み屋〉。

さてこれらの句々に遣われた、過去の助動詞と通称される「し」です。文法書によると、平安末頃から、過去に経験したことを述べる筈の「き・し」が少し外れた遣いようをさるようになり、江戸期には歌書雅文以外には単純に、文語文ですよ、と念を押したい時に遣われるようになった、とそう説明されていますけれども、「風邪の治りの悪かりし」は「昔は風邪の治りがわるかった」の意味にとられ、「モネに似し池」は「昔はこの池、モネの絵にそっくりだった」の意にとられかねない。「風邪の治りの悪くなり」と直したら口語に近く、「モネに似て池いっぱいの」でもやっぱり文語から遠ざかりそうだと感じて「し」を遣った、そうに違いありません。

あるいは〈十二月来てしまひぬといふ思ひ〉の方が文章として正しいのですが、「し」に過去の意味

があること全く考慮に入ってないわけですから遠慮なく「来てしまひし」とするわけでしょう。但しこの句では、「文語文ですよ」と念を押す「し」、ととること可能ですが。

ずっと昔のこと。高浜虚子の五女・高木晴子が次のような句を発表したことがあります。

〈母ませし年を惜しみて余りある〉

「母ませし」は真っ当に読めば、現在は母上、在世していないことになる。現実は、まだお元気な母上のいらっしゃる歳の瀬を惜しみて余りある、と上手に表現しているわけですから、「母します年」と真っ当に措いて何処に不足があるというのでしょう。

「江戸期には歌書雅文以外には」と辞書の説明にあり、といいましたが、俳諧の作者中江戸語で句を作っている人ありません。川柳の隆盛とともにそうでもなくなりますが、少なくとも意識としては文語で作っている。生存中のお母さんに向かって「母ませし」はあり得ないのです。殺すことになる。

試しに蕪村の句を二、三例にとります。

嵯峨に帰る人はいづこの花に暮れし

作者蕪村は「帰る人」の日暮れをまだ見ていませんので、「花に暮れし」は受験文法に照らすと「誤った〈し〉」ということになりますけれど、「念押しの〈し〉」ですね。「母ませし」とは違う。

御手討の夫婦なりしを衣更

御手討に成りかけたのはむかしのことですから、文法通りの「し」。

芭蕉の

一つ脱いで後ろに負ひぬ衣更

は現代のある人なら「一つ脱いで後ろに負ひし」とするのでしょうね。江戸期にはこんな「し」は一句としてない。「モネに似る池いっぱいの」として何がいけないのでしょうか。不可思議。

そして

木枯に吹き寄せられし立ち飲み屋

面白い句ですけど石動さん、意味がとり難い、と仰有っています。当然です。「吹き寄せられし」としたために「立ち飲み屋」へ言葉がつながってしまった。木枯に吹き寄せられるのは立ち飲み屋であるかのように。

芭蕉には、接続助詞「て」で場面が変わる、という句が少なくなくあります。

雲の峰いくつ崩れて月の山

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな

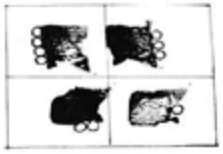
なんかはそうでしょう。〈雲の峰いくつ崩れし月の山〉では崩れるのは雲か山か。

さてそこで、

木枯に吹き寄せられて立ち飲み屋

と措くことで中七に休止があって、ひょうひょうと立飲み屋に入ってゆく作者が見えてくる。木枯に吹きよせられるごとく。

何でもいいから「し」を据う、ということと、時と場合であることを知って遣う。このあいだにこんな差があることを知るべき、と思うのです。



あとがき

鑑賞文御礼

秋川泉さん、森なほ子さんには二年の長きにわたりあを作品の鑑賞文をお書きいただきました。泉さんの作者の心に添ふ鑑賞、そしてなほ子さんの技術面にも言及していただき名コンビ振りでした。。そして有意義で楽しい欄にしていただきました。ありがとうございました。

バトンは七郎衛門吉保さん、赤座典子さんに渡りました。ご苦労ですがよろしくお願ひします。

誌面変更

読みやすくと　レイアウト変更で発行遅れてしまいました。

扉のこと

関合正昭画伯の略歴、。関合正明（1912-2004）は27歳で満州に渡り、文教部嘱託画家として働きながら「黄土坡美術協会」結成などの活動を展開します。

終戦による帰国後は画壇を離れ、挿絵の仕事のかたわら、個展での作品発表と俳句・随筆にいそしむ独行の画家・文人として、静かに支持者を増やしていきました。

1970年ポルトガル在住の友人、檀一雄の招きで渡欧したのを機に、国内外で描いたスケッチから味わい深い風景画の佳品をうみだすとともに、北鎌倉の閑静な住まいから日常なにげない物事に注ぐ鋭いまなざしと非凡なデッサンで、その画境に深まりをみせます。

（神奈川県立近代美術館より）

『獐』の高島茂と親交がありその縁でカットを応援して下さった。下世話な話だが金額にしたら○○といふ贅沢なお話。「カットが大きすぎる、墨だまりがただあればいいのだから」と教へていただいた。わが家の数軒先の方に額を頼まれたことがあった。その方の父上が満州で白馬にのり出勤し、廟を建てたと聞いた。画伯からもそこで壁画をお描きになったと聞いた。お引合はせの約束は、獐を辞めたため果たせなかった。

（喜孝）

二〇一九年二月号
発行日　二月二十五日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）